

日本語学習者における接続助詞「～から」の発達過程：学習環境の違いと接続助詞「～ので」との比較から

著者	佐々木 藍子
雑誌名	国立国語研究所論集
号	19
ページ	89-108
発行年	2020-07
URL	http://doi.org/10.15084/00002830

日本語学習者における接続助詞「～から」の発達過程

——学習環境の違いと接続助詞「～ので」との比較から——

佐々木藍子

東京学芸大学大学院（配置校 横浜国立大学）博士後期課程／
国立国語研究所 研究系 日本語教育研究領域 非常勤研究員

要旨

本研究では、日本語学習者がどのように接続助詞「～から」を習得していくのか、学習環境の違い、同様の接続形式を持つ別の文法項目である接続助詞「～ので」の発達過程との比較、という複数の観点から、そのプロセスを探ることを目的とし、国立国語研究所で公開されている『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)の海外の教室環境学習者（中国語、韓国語、英語を母語とする学習者）のデータを使用して、分析を行った。その結果、次のことが明らかとなった。1) 日本語学習者における接続助詞「～から」の発達過程は、国内の教室環境、海外の教室環境という異なる環境で学習した場合でも、同様の発達過程をたどる。2) 接続助詞「～から」「～ので」という異なる文法項目であっても、同様の接続形式を持つ文法項目の場合、両者は同様の発達過程をたどる。3) 接続助詞「～から」と「～ので」は同様の発達過程をたどるが、相違点として、発達する時期と発達スピードが異なること、非規範的な使用は接続助詞「～から」に比べて、接続助詞「～ので」では出現が少ないことが挙げられる。そして、その要因には、文法項目の学習順序と機能、文法の難易度などが影響している可能性があることを論じた*。

キーワード：日本語学習者、発達過程、接続助詞「～から」「～ので」、学習者コーパス「I-JAS」

1. はじめに

成人の第二言語習得においては自明のことであるが、第二言語を学ぶ際、その言語の語彙や文法を学習したからと言って、すぐに使えるようにはならない。言語を習得するまでには、非規範的な表現を産出したり、逸脱を起こしたりなど、さまざまな過程を経ると言われている。それでは、実際にどのような過程を経て、規範的な使用に至るのだろうか。

Kellerman (1985) によると、言語発達は第一言語習得においても第二言語習得においても、U字型曲線を描くように発達していくとされている。この「U字型曲線を描くように」とは、ある文法項目を学習し始めた頃は規範的に使えていても、途中で非規範的な使用に転じ、その後また規範的に使用できるようになるというものである。これについては、英語を第一言語として習得

* 本研究は国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(プロジェクトリーダー：石黒圭)および科学研究費補助金 基盤研究 A (課題番号 16H01934)「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」(プロジェクトリーダー：迫田久美子)の研究成果を報告したものである。また、本稿は第四回学習者コーパス・ワークショップ & シンポジウム (2018年12月22日、於：東京工業大学キャンパス・イノベーション・センター)での口頭発表の内容をもとに作成したものである。発表に際し有益なコメントをくださった皆様、I-JASの書き起こし作業に従事してくださった方々に感謝申し上げる。

した子どもの動詞過去形の発達過程が、よく例として挙げられる。英語の動詞には、規則動詞と不規則動詞があり、その内の不規則動詞「come」の過去形について、最初は「came」ときちんと使っていたにも拘わらず、その後、規則動詞の過去形には「-ed」を付加するというルールを習得すると、そのルールを不規則動詞にも援用し、「comed」という非規範的な使用をし始める。そして、ある一定の時期を経ると「came」と規範的な使用へと移行する。日本語の第二言語習得においても、子どもや成人を対象とした研究で、U字型曲線の発達過程を経ることが明らかとなっている（長友 1993, 奥野 2001, 橋本 2006, 木下 2007 他）。

しかしながら、大人の第二言語習得の場合、非規範的な使用から抜け出せず、そのまま定着化してしまう学習者もいる。このような非規範のまま定着化しやすい文法項目については、適宜、教師の介入・指導が必要なのではないかと考える。

筆者のこれまでの日本語教育経験において、多くの学習者に見られ、非規範のまま定着してしまう例として、接続助詞「～から」を使用する際に、助動詞「だ」を脱落させたり、付加したりするといったものがある。以下、例 (1) (2) に示す。

- (1) 今の私は学生から、時間はたたくさーんある、あります (I-JAS: CCM48-I) ¹
 (2) でも彼は、あーかわいいだから好きです (I-JAS: CCM37-I)

接続助詞「～から」については、木下 (2007) が、国内の教室環境学習者の使用する「～から」に焦点を当てて、その発達過程を提示している。「～から」は、「明日は仕事があるから、行けません」「あのスーパーは便利だから、よく行きます」「あのバスは便利でしたから、よく乗っていました」のように、前接する語の品詞および活用形によって「～から」「～だから」という形式を使い分ける必要がある。そのため、習得の過程で、上記 (1) (2) のような使用例が見られると考えられる。

接続助詞「～から」以外にも、同じような非規範的な使用が見られる。以下の例 (3) (4) は接続助詞「～ので」における非規範的な使用の一例である。() 内の内容はその前の語の補足情報である。

- (3) 『めいていたん (名探偵) コナン』が大好きので、えっとーおー高校生を卒業したからえと日本語を選びましたが… (I-JAS: CCM24-I)
 (4) 両親は仕事で忙しいなので、なんか、ほうがく (放課後)、ほうが、ほうがく (放課後) でも、えっとー、学校に (I-JAS: EAU24-I)

接続助詞「～ので」は「～から」と同様に前接する語の品詞および活用形によって、助動詞

¹ 括弧内は、データ名 (I-JAS) と調査 ID およびタスク種別を示す。これらについては、4.1 節を参照のこと。

「な」²を挿入するかしないかを判断しなければならない文法項目である。上記の例(3)(4)は、接続助詞「～から」使用時の助動詞「だ」と同じように、助動詞「な」を挿入するかしないかの操作がうまくできていないため、非規範的な使用となっているものである。

日本語には理由表現が複数あるが、その中でも接続助詞「～から」と「～ので」はよく使用され、機能も大変類似している。この形態的にも、機能的にも似通った文法項目の発達は同じ過程をたどるのだろうか。

本研究では、日本語学習者がどのように接続助詞「～から」を習得していくのか、学習環境の違い、同様の接続形式を持つ別の文法項目である接続助詞「～ので」の発達過程との比較という複数の観点から、そのプロセスを探ることを目的とする。これらを明らかにすることで、どの時点でどのような指導が必要かを提言できるのではないかと考える。

2. 先行研究

2.1 接続助詞「～から」の発達過程

接続助詞「～から」を扱った研究としては、日本語学における接続助詞「～ので」との意味・用法の違いについての研究(永野 1952, 趙 1988, 岩崎 1995 他)や、日本語教育において原因・理由という機能あるいは接続表現の習得に関する研究で、複数ある文法項目のうちの1つとして分析項目に含まれている場合が多い(栃木 1989, 田代 1995, 木山 2003, 峯 2007 他)。接続助詞「～から」の習得に特化した研究は管見の限り少ないが、子どもの自然習得に関する研究(橋本 2015)と成人自然習得者を対象とした研究(木山 2002)がある。どちらも他の文法項目との競合の時期を経て時間をかけながら習得されていくプロセスが示されている。成人の日本語学習者を対象とした木山(2002)の研究では、フィリピン人自然環境学習者5名を横断的に調査したデータをもとに、どのように接続助詞「～から」と接続詞「だから」を競合させながら文法化するかということに焦点をあてている。この研究では、学習者の産出した接続助詞「から」を以下の4つに分類して、分析している。

〈接続助詞「～から」の分類基準〉(木山(2002: 21)を参考に筆者がまとめた)

から型 : 先行語が動詞・イ形容詞・助動詞の場合

だ+から: から型接続時に「だ」を入れてしまう誤用(例: ビザ貫うの厳しいだから)

だから型: 先行語がナ形容詞・代名詞・接尾辞の場合

だーから: だから型接続時に「だ」を入れない誤用(例: あたし大変 　からね)

その結果、次のような習得段階の仮説を提示している(木山 2002: 27)。

² 接続助詞「～ので」に前接する品詞の活用によって挿入が必要となる「な」については、名詞およびナ形容詞(形容動詞)の分類の仕方によって、「な」の品詞の考え方が分かれるところであるが、本稿では、この「な」は助動詞「だ」の連体形として扱うこととする。

- 1) 接続助詞「から」接続詞「だから」分離段階
理由を表す形式として、文頭では接続詞「だから」、文末では接続助詞「から」と分離して捉えられており、複文はみられない。
- 2) 接続助詞「から」接続詞「だから」競合段階
単文を接続詞「だから」でつなぐ方法を継起として「だから型」（名詞・ナ形容詞等を先行語とする接続助詞「から」）を使用した複文の産出が始まる。
- 3) 接続助詞「から」接続詞「だから」の意味が拡張する段階
自然習得環境のもとで接続助詞「から」接続詞「だから」の意味がそれぞれに拡張して、競合関係が相対的に薄くなり、「から型」（動詞・イ形容詞等を先行語とする接続助詞「から」）にのみ接続形式の誤用が残る。
- 4) 複文構造の重層化段階
長く複雑な構造をもつ複文を産出し、統語上の誤用は僅かになる。接続助詞「から」接続詞「だから」の競合は終わり、他の形式と組み合わせることで、更に意味を拡張する。

しかし、この仮説は日本語学習者5名の横断的なデータを学習者の日本語のレベル順に並べ、それをもとに分析して得られた習得段階であるため、日本語学習者に広く一般化できるものであるかは不明である。

木下（2007）では、国内の教室環境の日本語学習者を対象に、接続助詞「～から」の発達過程について、木山（2002）の分類方法を援用し、サコダコーパス B³（縦断データ）と KY コーパス（横断データ）の中国語母語話者および韓国語母語話者の発話データを分析している。その結果、以下のような接続助詞「～から」の発達過程を提示している。

〈木下（2007）の接続助詞「～から」の発達過程〉（木下（2007）を参考に筆者が例文を追加）

- ①学習初期段階から、「から型」の使用に加え、非規範的な使用である「だーから」がほぼ同時に見られる。
 - (5) から型：先生はき、厳しくないからおもしろい (C3-2)
 - (6) *4 だーから：調査者：少ないじゃない
学習者：研究生から (C3-2)
- ②「から型」に加え、「だから型」が出現し始めると、非規範的な「だーから」は減少する。
 - (7) だから型：2階たつてのアパート、んー、こんな、アパート、日本経済大国だから、多分もうないかなー、の、き、おー、来る前は思ったんです (C3-5)
- ③その後、「から型」、「だから型」の使用とともに、不要な「だ」を付加する別の非規範的な使

³ このコーパスは JSL 環境の中国語母語話者3名、韓国語母語話者3名を対象に、縦断的に3年間、発話データを収集（3～4か月に1回）したデータで、のちにバージョンアップし、Corpus of Japanese as a Second Language (C-JAS) となる。

⁴* は非規範的な使用を示す。

用「だ+から」が出現する。

- (8) *だ+から：いや私言わない{笑}ほんとに上手，じゃないだからね (C3-7)

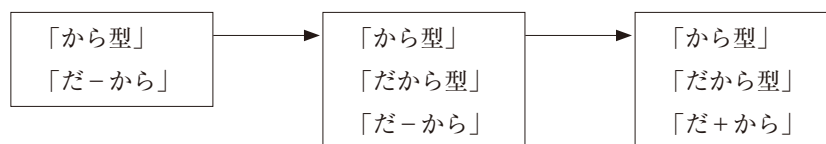


図1 会話における接続助詞「から」の発達過程の仮説 (木下 2007)

接続助詞「～から」を使用するには、前接する語やその品詞および活用形によって、「～から」あるいは「～だから」という2つの形式を使い分ける必要がある。前接する語が動詞、イ形容詞の普通形の場合は、そのまま「～から」を接続すればよいが（食べるから／かわいいから）、名詞、ナ形容詞の普通形の場合は、「～だから」と助動詞「だ」を挿入する必要がある（学校だから／便利だから）。しかし、名詞、ナ形容詞に接続する場合でも、過去形や否定形、「です・ます」を使った丁寧形に接続する場合は、助動詞「だ」を挿入する必要はなく、「～から」形式のままでも良い（学校だったから／便利じゃないから／先生ですから）。このように、接続助詞「～から」を使用するには、前接する語に合わせて、「だ」の挿入・非挿入を操作する必要がある。この点で学習者は混乱しているのではないかと考えられる。

2.2 接続助詞「～ので」に関する研究

本研究で分析対象とする接続助詞「～ので」に関する研究としては、日本語学の分野において「～から」と「～ので」の違いについて論じられるものが多い。その中でも先駆的な論文は永野 (1952: 38) で、以下のように記されている。

「から」は表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結びつける言い方、「ので」は前件と後件とが原因・結果、理由・帰結の関係にあることが、表現者の主観を越えて存在する場合、その事態における因果関係をありのままに、主観を交じえずに描写する言い方⁵

そのため、「～から」が主観的、「～ので」は客観的と言われ、日本語教育や教科書でもそのように説明される場合も多く、「～から」を先に提示しているものが多い。

⁵ 引用に当たっては、読みやすさを重視し、旧字体を新字体に改めた。

2.3 接続助詞「～から」と「～ので」の関係性

すでに、接続助詞「～から」と「～ので」は機能的に似ていることを述べたが、それ以外に両者がどのような関係にあるかを明確にしておく。南（1993）は現代日本語の従属句を分類する基準を、「従属句の内部構造における成分、要素の現われ方」、「従属句が連体修飾句に含まれるかどうか」、「従属句とそれを含む文（主文）との関係で、とくに主文の述部の文法的性格（いわゆるモダリティなど）に、ある従属句の存在が何らかの制約を及ぼすかどうか」とし、それに基づいて、以下のA類、B類、C類の3種類に分類している。なお、「成分というのは、文の構造中の述部そのもの、および述部以外の諸要素のことである。また、要素というのは、述部を構成する諸要素のこと」（南 1993: 86）としている。

〈南（1993）の従属句の分類〉（南（1993: 86, 96）を参考に筆者がまとめた）

A類：現れる成分、要素の範囲がもっとも限られる。

～ナガラ（非逆接）、～ツツなど。

B類：現れる成分、要素の範囲がA類より広くなるが、次のC類よりは狭い。AとCの中間。

～タラ、～ト、～ナラ、～ノデ、～ノニ、～バなど。

C類：現れる成分、要素の範囲が最も広い。

～ガ、～カラ、～ケレドモ（ケレド、ケドモ、ケド）、～シなど。

この分類によると、接続助詞「～から」はC類、「～ので」はB類とされている。C類に分類されたものは、その接続助詞に前接することのできる要素の種類が最も多いとされている。B類は、A類ほど多くないが、C類よりは制約がある。例えば、B類の「～ので」は「*書くだろうので」「*書くまいので」のように、推量の「ダロウ」や否定推量の「マイ」などに接続することができない。しかし、C類の「～から」はB類より前接することのできる要素の種類が多いため、「書くだろうから」「書くまいから」のように接続することが可能である。このように、接続助詞「～ので」は「～から」より制約があることが分かる。

3. 目的と課題

先行研究では、日本国内の教室環境および自然環境の限られた少数の学習者を対象に接続助詞「～から」の発達過程を探っている。しかし、日常的に日本語が話されているJSL環境で日本語を学習する場合と、日常的に日本語が話されていないJFL環境で日本語を学習する場合とでは、日本語のインプット量が大きく異なるため、学習環境の違いが習得に影響することも考えられる。

また、文法項目にはそれぞれ習得の難易度があるが、同じ難易度の文法項目の場合は、1つひとつを順番に習得していくのではなく、複数の文法項目が並行して発達していくのではないかと考える。接続助詞「～から」と「～ので」はともに初級で導入される文法項目であることから、難易度も大きくはかけ離れていない。そして、同様の接続形式を持っているため、並行して発達が進むのではないかと考えられるが、2つの文法項目が実際に同じ発達過程をたどるかはまだ明

らかとなっていない。このような文法項目が同じ発達過程をたどるかどうかを明らかにすることで、日本語学習者の文法習得におけるメカニズム解明の一助としたいと考える。

そこで、本研究ではこれまでの研究とは異なる JFL 環境の日本語学習者を対象とし、接続助詞「～から」の発達過程が他の文法項目にも広く一般化できる過程であるか、分析対象とする学習者数を増やして分析する。具体的には、以下 3 点を研究課題とする。

課題 1：接続助詞「～から」の発達過程は学習環境が異なっても、同様の発達過程をたどるのか。

課題 2：異なる文法項目（接続助詞「～から」と「～ので」）であっても、使用する際に同様の操作を必要とする文法項目の場合、両者は同様の発達過程をたどるのか。

課題 3：接続助詞「～から」、「～ので」の発達過程に相違点はあるか。あるならば、それはどのような点が異なるのか。

4. 分析の概要

4.1 分析データ

分析には、国立国語研究所で公開されている『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（以下 I-JAS）を使用した。このコーパスは 12 の異なる母語を持つ海外の教室環境の日本語学習者、国内の教室環境・自然環境の日本語学習者および日本語母語話者の発話と作文のデータを横断的に収集し、収録したコーパスである（迫田他 2016）。2016 年より段階的にデータが公開されており、2019 年 12 月時点では全データ 1,050 名分中、第四次データまでの 875 名分が公開されている。収録されているデータは、発話データ、作文データともに多岐にわたる 7 種類 12 タスクで、そのうち今回分析に使用したデータは「対話」タスクのデータである。「対話」は調査参加者と調査者（日本語母語話者）との 1 対 1 の 30 分程度の会話である。話題は全 15 項目で、学習者本人に関する過去、現在、未来についての話や、意見陳述などが設定されている（迫田他 2016）。対話データには、タスクの種別を示す「I」という記号が付与されている。学習者のデータを例示する際には、以下の調査地を表す記号とともに対話タスクを表す記号の「I」を明記する。

I-JAS には様々な母語の学習者のデータが収録されているが、本研究では先行研究の結果との比較も行うため、先行研究で対象とされていた韓国語母語話者（KKD/KKR）50 名、中国語母語話者（CCM）50 名に加え、英語母語話者（EAU/EUS）50 名を含む、計 150 名のデータをまとめ、日本語のレベル別に分析することとした。可能であれば、母語別で分析したいところだが、I-JAS は母語によって欠けているレベルがあるため、今回は母語別では分析しないこととした。学習者の日本語の習熟度は SPOT および J-CAT でレベル判定が行われている。今回は SPOT 90 の点数⁶に従い、日本語のレベルを初級、中級、上級に分類した。レベル別の人数は、初級 17 名、中級 103 名、上級 30 名であった。

⁶ SPOT の点数解釈表では 0～30：入門，31～55：初級，56～80：中級，81～90：上級となっている。
<http://ttbj-tsukuba.org/p1.html>

4.2 分析方法

分析は、I-JAS 付属の検索システムである I-JAS 中納言 2.4.2 短単位データ 20180502 版を使用した。I-JAS の「対話」タスクで使用された原因・理由を表す接続助詞「～から」および接続助詞「～ので」を全て抽出し、木山（2002）の 4 分類にならって分類し、レベル別に使用数を計上した。分析に使用する「対話」タスクは 1 データにつき 30 分程度のデータであるが、学習者によっては発話する量（語数）に差があると考えられる。そのため、データ間で正確に比較できるよう、学習者ごとに 100 万語あたりの調整頻度（PMW）を算出し、分析した。また、本研究では、4 分類の名称について、接続助詞「～から」においては、規範的な使用を「～から」、非規範的な使用を「だ」脱落、「だ」付加、接続助詞「～ので」においては、規範的な使用を「～ので」、非規範的な使用を「な」脱落、「な」付加、と呼ぶこととした。脱落は、形式上、必要である箇所に「だ」や「な」が含まれていないもので、付加は、不要である箇所に「だ」や「な」が余分に付与されているものを指す。つまり、形式上は、「～から」と「だ」脱落、「～だから」と「だ」付加は同じで、「～ので」と「な」脱落、「～なので」と「な」付加は同じである。

「だから」「なので」という形式は接続詞として使用されることもある。接続助詞「～だから」「～なので」との判断が難しい場合は、実際に 1 つひとつの音声を確認し、形式の前後のポーズの有無や音調から判断して、接続助詞として使用されたもののみを対象とした。また、「～ので」については、口語的な表現として「～んで」「～なんで」という形式もあるが、これらは「～ので」「～なので」と同様に使用されるため、分析対象に含めた。

今回の分析では、横断データを使用していることから、1 人の学習者の発達過程ではなく、多数の学習者の集計結果から発達過程の傾向を探ろうとしている。そのため、初級と分類されていても、文法項目によっては他の学習者より習得が進んでいたり、遅れていたりすることも考えられる。その点を考慮し、本研究では各形式の傾向として使用の数値の多いほうがそのレベルの特徴を表していると解釈し、考察することとした。

5. 分析結果と考察

5.1 JFL 環境における日本語学習者の接続助詞「～から」の発達過程

まず、木下（2007）で見られた接続助詞「～から」の発達過程が広く一般化できるものであるかを確認するため、海外の教室環境における日本語学習者の接続助詞「～から」の使用傾向を見ていく。表 1 は各レベルの学習者が使用した接続助詞「～から」の分類別の PMW の平均と各レベル内での割合を表にまとめたものである。

この表によると、初級から「～から」、「だ」脱落、「～だから」、「だ」付加の 4 つの分類全てが出現していることが分かる。規範的な使用である「～から」と「～だから」においては、「～から」の方が圧倒的に多く使用されており、非規範的な使用については「だ」脱落の PMW が 253.8 回、「だ」付加の PMW が 36.0 回と、圧倒的に「だ」脱落が多い。初級では、「～から」と「だ」脱落の使用が全体の 96% 以上を占めており、「～だから」、「だ」付加は 3.9% と僅かしか見

られなかったことから、この時点では、先行研究と同様に前接する語の品詞および活用形に関わらず、「～から」のみを接続させて使用している学習者が多いことが窺える。

中級でも、初級と同様に全ての分類が出現しているが、「～から」、「～だから」の使用数は初級に比べ飛躍的に伸びている。また、非規範的な使用は、「だ」脱落のPMWが36.4回、「だ」付加のPMWが164.9回と、初級と頻度が逆転し、「だ」付加の方が多くなっていた。そのため、この時期の前後から原因・理由を表す形式として、「～から」だけでなく、「だ」を挿入した「～だから」という形式を使用する場合があるということに気が付き始めたことが推察できる。そして、「～だから」形式を使用し始めたことによって、不要な箇所にも過剰に「だ」を付加させる非規範的な使用も増加しているのではないかと考えられる。

上級になると、「～から」、「～だから」形式の使用のみが見られ、非規範的な「だ」付加、「だ」脱落は出現していなかった。そのため、上級になると、原因・理由を表す形式として、「～から」、「～だから」の使い分けができるようになることが推察され、「だ」に関する非規範的な使用も消失していくのではないかと考えられる。

表1 接続助詞「～から」の学習者レベル別使用に見るPMWの平均と割合

レベル	～から (規範)		「だ」脱落 (非規範)		～だから (規範)		「だ」付加 (非規範)	
	PMW	割合 (%)	PMW	割合 (%)	PMW	割合 (%)	PMW	割合 (%)
初級	2383.1	86.8	253.8	9.2	71.9	2.6	36.0	1.3
中級	3600.6	85.3	36.4	0.9	418.4	9.9	164.9	3.9
上級	2040.6	88.2	0.0	0.0	273.9	11.8	0.0	0.0

以上のことから、接続助詞「～から」の発達過程は、国内の教室環境と海外の教室環境のように、学習環境に違いがあっても、上記で述べた木下(2007)の接続助詞「～から」の発達過程と同様の傾向をたどることが明らかとなった。その傾向とは、学習初期段階では、「～から」の使用に加え、非規範的な使用である「だ」脱落が見られる。そして、「～だから」が出現し始めると、非規範的な「だ」脱落は減少する。その後、「～から」、「～だから」の使用とともに、不要な「だ」を付加する別の非規範的な使用が出現するというものである。さらに、本研究では、先行研究では明らかにならなかった非規範的な「だ」付加の使用が、上級になると減少する可能性があることも分かった。

5.2 接続助詞「～ので」と接続助詞「～から」の発達過程の比較

次に、接続助詞「～ので」の発達過程について見ていく。各分類の使用頻度は以下表2の通りである。この表から初級では「～ので」の使用のみで、「～から」に比べて、出現している分類の種類も使用数も少ないことが分かる。具体的に見ていくと、初級では1名のみが「～ので」形式を使用しているだけで、他の形式の使用は見られなかった。初級の学習者に見られた例は以下、(9)(10)に挙げた例である。

- (9) お母さんが、あの、地理学、が、よく、わかあ、わかーわかつたので、あの、私と、ほかの子供を、教えました (I-JAS: EAU29-I)
- (10) チェックしませんでした、でしたのであの、れいの、あのーかわって初めて、急に、あのほか、あん、そばにある、そばにあるあのー、車が (I-JAS: EAU29-I)

このことから、この時点ではほとんどの初級の学習者は「～ので」を使用しておらず、使用している場合でも、「～から」と同様に前接する語の品詞および活用形に関わらず、「～ので」のみを接続させて使用していると考えられる。

表2 接続助詞「～ので」の学習者レベル別使用に見る PMW の平均と割合

レベル	～ので (規範)		「な」脱落 (非規範)		～なので (規範)		「な」付加 (非規範)	
	PMW	割合 (%)	PMW	割合 (%)	PMW	割合 (%)	PMW	割合 (%)
初級	65.1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
中級	1586.4	81.5	36.7	1.9	295.2	15.2	28.2	1.4
上級	3186.6	76.6	11.7	0.3	942.4	22.7	18.2	0.4

そして、中級になると「～ので」、「な」脱落、「～なので」、「な」付加、全ての分類が出現したが、規範的な使用の「～ので」は PMW が 1586.4 回と全体の 81.5% を占めており、「～なので」は PMW が 295.2 回と 15.2% で、圧倒的に「～ので」の方が多かった。非規範的な使用については、「な」脱落の PMW が 36.7 回、「な」付加の PMW が 28.2 回と、両方の使用が見られ、そこまで大きな差ではないが、「な」脱落の方が多い結果であった。

その後、上級でも中級と同じく 4 つすべての分類が出現しているが、「～なので」の使用数は中級の 295.2 回から 942.4 回と 3 倍近くも増え、「～なので」の習得が進んでいることが分かる。そして、非規範の「な」脱落の PMW は 11.7 回、「な」付加の PMW は 18.2 回と中級とは逆転し、今度は若干の差ではあるが、「な」付加の方が多くなっていることも分かる。そのため、非規範的な使用の傾向は「な」の脱落から付加へと移行していると考えられる。また、上級での非規範的な使用の割合は、「な」脱落が 0.3%、「な」付加が 0.4% とわずかであることから、上級になるにつれて、これらの使用は減少する傾向にあるのではないかと推察される。

本分析では、接続助詞「～から」においても「～ので」においても、中級で「だ」および「な」の脱落と付加の使用が見られている。そこで、本研究で分析対象とした海外の教室環境学習者の接続助詞「～から」および「～ので」の発達過程において、1 人の学習者の中に 2 種類の非規範的な使用が同時に出現しているか確認した。以下表 3、表 4 に学習者が使用した助動詞「だ」や「な」に関する非規範的な形式の使用数をまとめた。これらの表では、EAU09 を除き、脱落と付加の使用が同時に出現していないことが分かる。そのため、1 人の学習者の中では、非規範的な「だ」や「な」の脱落と付加は同時には産出されにくいのではないかと考えられる。

表3 接続助詞「～から」において使用された非規範的な「だ」の使用状況

レベル	調査 ID	「だ」脱落	「だ」付加
初級	EUS39	2	0
	KKD19	5	0
	EAU09	2	1
中級	EUS15	2	0
	EAU20	1	0
	CCM46	1	0
	CCM48	1	0
	CCM33	1	0
	CCM28	0	1
	CCM37	0	7
	CCM32	0	3
	EAU29	0	9
	EAU32	0	1
	EAU03	0	1
	EAU34	0	4
	EAU07	0	1
	KKD06	0	1
	KKD45	0	1
	KKD18	0	2
	KKR57	0	2
	KKD05	0	1
	KKD37	0	1

表4 接続助詞「～ので」において使用された非規範的な「な」の使用状況

レベル	調査 ID	「な」脱落	「な」付加
初級	CCM08	1	0
	CCM24	7	0
	EUS24	2	0
	EAU18	1	0
	EUS14	1	0
中級	CCM25	0	1
	EAU32	0	2
	EAU24	0	1
	KKD45	0	3
	KKD10	1	0
上級	KKD23	0	1
	KKD04	0	1

1名 EAU09 の接続助詞「～から」には脱落と付加の非規範的な使用が同時に出現していた。そこで、この学習者が使用した接続助詞「～から」の例を詳細に確認した。以下表5は、EAU09 の使用例を前接する語とともに取り出し、まとめたものである。この表から、動詞は「できる」に後続する場合にのみ直接「～から」を、それ以外の動詞には丁寧形を使用し、「～から」を接続している。そのため、「できる」については、「できるから」とかたまりを作り、それ以外の動詞は「丁寧形+から」とルールを作っていると考えられる。そして、名詞とイ形容詞に後続する場合には「～から」と「～だから」で揺れており、非規範的な「だ」の使用が見られた。

表5 EAU09の接続助詞「～から」の産出例

品詞	出現例	分類
動詞+ます/ました	病気になる, なりましたから	から
	食べましたから	から
	話しましたから	から
	しますから	から
動詞(できる)	泳ぐ, ことができるから	から
	することが, できるから	から
	いろいろな, こと, できるから	から
名詞	ラブストーリーから	だ脱落
	ベトナム人, から	だ脱落
	日本語の先生, だから	だから
	経済だから	だから
イ形容詞	忙しい, しいから	から
	大きい, だから	だ付加

非規範的な使用となっている発話部分を具体的に見てみると、例(11)(12)のように、非規範的な使用の直前に読点が付与されていることが観察された。この読点は発話のポーズを示すものであるが、「～から」を接続する前後にポーズが頻繁に出現している。そのため、「～から」と「～だから」のどちらの形式を使用するか考えており、モニターを働かせるための時間が必要で、とぎれてしまったのではないかと推察される。また、別の学習者ではあるが、例(13)のように非規範的な形式を表出した直後に、自ら訂正し、規範的な表現に言い直している例も見られた。これらの学習者は、まさに「～から」のみの使用から「～だから」の使用への過渡期にいるのではないかと考えられる。

〈EAU09の非規範的な「だ」の使用例〉

(11) 波?波は、ちょっと危ないんです、お、大きい、だからです

(12) えと私はベトナム人、から、えっと、ベトナムろうり(料理)⁷は、少し、あの、つまりない

〈CCM46の非規範的な「だ」の使用例と訂正例〉

(13) あの月曜日ーだからあのー、あー、んー、ラッシュアワーから、らラッシュアワーだから
あの、あの、ちかでつ(地下鉄)なんちかでつ(地下鉄)とかあの

以上のことから、接続助詞「～ので」の発達過程をまとめると、以下の通りであることが分かった。接続助詞「～ので」を使い始める場合、まず「～ので」のみを接続して使用する。続いて、前接する語によっては、非規範的な「な」脱落も見られる。その後、「～なので」形式を使い始

⁷ 括弧内は直前に発話された語彙で、学習者が本来意図したと思われるものを示す。

めるようになると、「な」脱落が減少していく。そして、「～ので」「～なので」の使用が増加してくると、今度は「な」付加が見られるようになる。今回の分析では、「な」付加の使用が完全に見られなくなる過程は観察できなかったが、減少傾向にあることが観察された。上記のような発達過程を経ることから、接続助詞「～から」と「～ので」の発達過程は同様の傾向をたどると考えられる。

5.3 接続助詞「～から」「～ので」の発達過程における相違点

これまでの分析により、接続助詞「～から」と「～ので」の発達過程は同様の過程をたどることが明らかとなったが、最後に両者の発達過程における相違点について考察する。

分析結果の表1、表2から、両者の発達過程における相違点が2点、挙げられる。1つは各分類が多く出現する時期が異なり、習得のスピードが異なること、もう1つは非規範的な使用は接続助詞「～から」に比べて、接続助詞「～ので」では出現が少ないことである。

まず、1つ目の各分類が多く出現する時期が異なることについて考察する。接続助詞「～から」は4つの分類すべてが初級から観察され、その時期に非規範的な「だ」脱落の出現が目立った。そして、中級では、「～だから」が増加し、それに伴い「だ」付加も増加した。そして、上級になると、「～から」「～だから」の使用のみとなるように、初級から上級にかけて緩やかに習得が進んでいた。しかし、接続助詞「～ので」は「～から」に比べて、使用され始める時期が少し後にずれ込み、全ての形式が出現したのは、中級からであった。そのため、「～から」では初級から見られた非規範的な助動詞の脱落も中級で最初に見られ、同じく「な」付加も脱落より少ない程度で観察された。そして、上級では「な」脱落より「な」付加の方が多くなるが、接続助詞「～から」の付加ほど極端に多くは見られなかった。このように、接続助詞「～ので」の発達は中級から上級で急激に進んでおり、ここに発達の過程が集約されていることが分かる。つまり、接続助詞「～ので」は「～から」より少し遅れて発達が始まり、その発達のスピードも「～から」に比べて早いことが窺える。すなわち同様の接続形式を持つ接続助詞同士でも、同様の発達過程はたどるが、発達していく時期やスピードには違いが出ることが明らかとなった。これについては、文法項目の学習順序と機能、文法の難易度が影響しているのではないかと考えられる。

1つ目の、文法項目の学習順序と機能についてであるが、初級では接続助詞「～ので」の使用がほとんど見られなかった。その要因として、日本語教育の現場で「～ので」より「～から」を先に提示・導入することが考えられる。そのため、学習者は初級の段階で「～から」を主に使用しているのではないだろうか。以下、表6にこれまでよく使用されてきた日本語の総合教科書で接続助詞「～から」「～ので」を提示している箇所についてまとめた。この表から、接続助詞「～ので」より「～から」の方が先に提示されていることは明らかである。

表6 日本語の教科書での接続助詞「～から」「～ので」の導入課

	「～から」	「～ので」
Situational Functional Japanese Vol.1・Vol.2	第4課／初級全16課	第9課／初級全16課
みんなの日本語初級I・II	第9課／初級全50課	第39課／初級全50課
初級教科書げんきI・II	第9課／初級全23課	第12課／初級全50課

また、上記でも述べたように、接続助詞「～から」と「～ので」はともに原因・理由を表す接続助詞である。学習者は同じ機能を持つ文法項目が複数ある場合、先に学習したものを継続して使用し、後で学習した文法項目はその文法項目の必要性を感じない限り使用しない傾向がある。そのため、接続助詞「～ので」の使用開始が遅れ、「な」脱落が中級にずれ込んだのではないかと考える。以下、接続助詞「～から」と「～ので」の各学習者の総使用数を集計し、散布図に示したものを、図2と図3に示す。

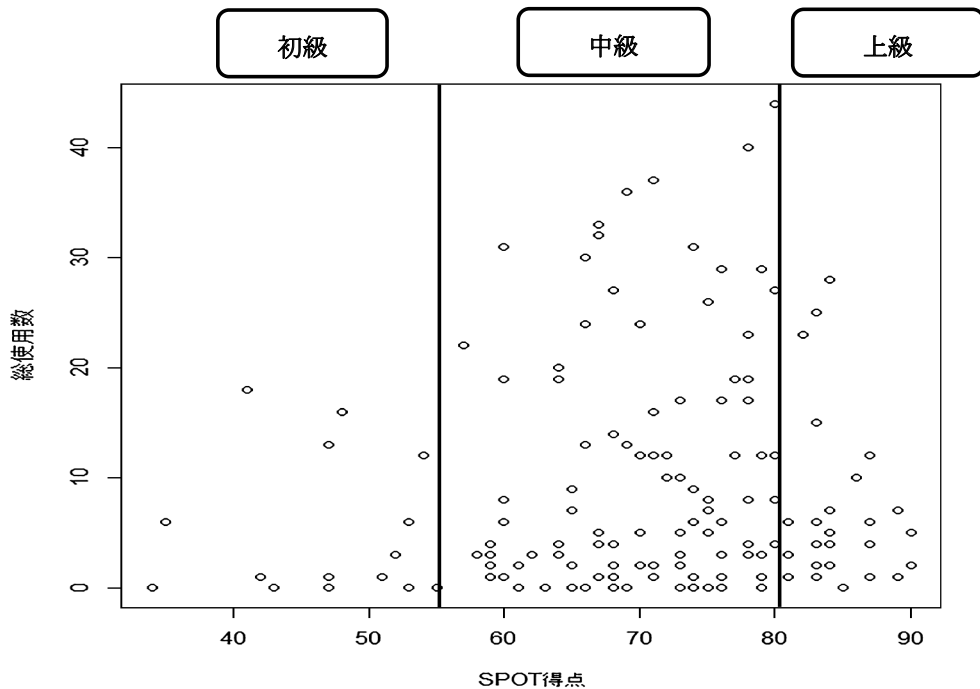


図2 学習者の SPOT 得点と接続助詞「～から」の総使用数

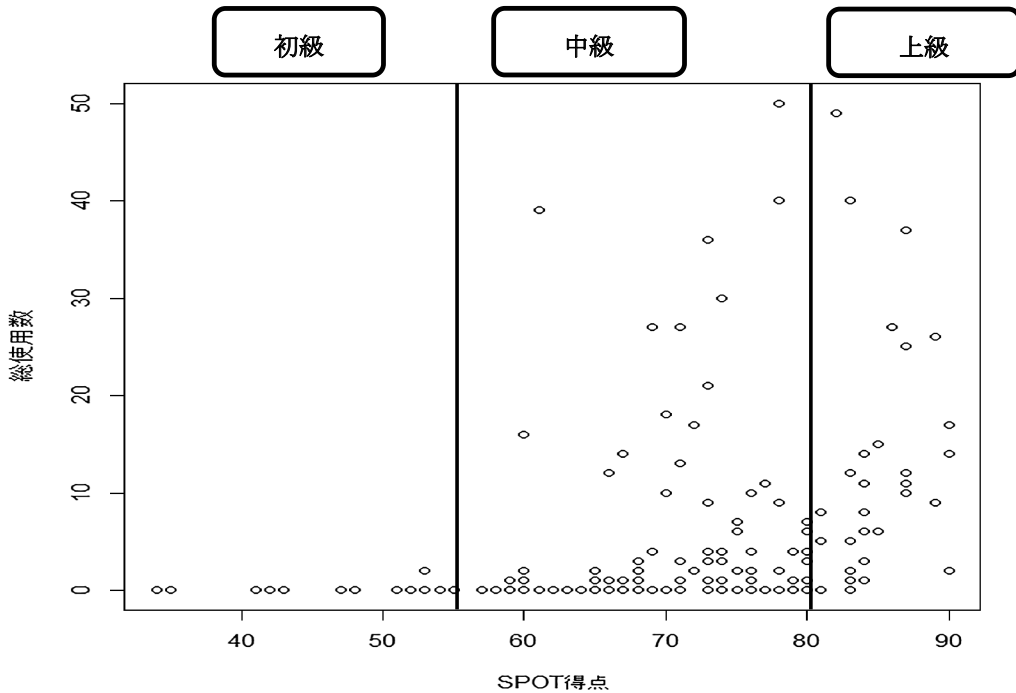


図3 学習者の SPOT 得点と接続助詞「～ので」の総使用数

この図2, 図3を見ると, 初級の段階では, 原因・理由を表す場合, 接続助詞「から」を主に使用し, 中級で使用のピークを迎えていることが分かる。しかし, 「～ので」は中級半ばから上級にかけて使用数が増加している。ここからも, 接続助詞「～ので」は「～から」より少し遅れて習得が始まっていることが推察できる。

また, 2つ目の文法の難易度については, 2.3 で述べた南 (1993) の従属句の分類をもとに考える。この分類によると「～から」はC類で, 「～ので」はB類とされていた。C類は前接することのできる要素の種類が一番多いが, B類はC類より制約がある。接続助詞「～から」と「～ので」を比較すると, C類である「～から」の方が, 使用する際の難易度は低いのではないかと考えられる。そのため, 日本語学習者も「～から」の方に使いやすさを感じ, 「～から」から使用し始めたのではないかと考える。

次に, 相違点の2つ目である非規範的な使用は接続助詞「～から」に比べて, 接続助詞「～ので」では出現が少ないことについて考察する。各接続助詞の非規範的な使用の量を見ると, 接続助詞「～から」では初級で「だ」脱落のPMWが253.8回, 中級で「だ」付加のPMWが164.9回見られているが, 接続助詞「～ので」では, 中級で「な」脱落のPMWが36.7回, 「な」付加のPMWが28.2回, 上級で「な」脱落のPMWが11.7回, 「な」付加のPMWが18.2回と, 接続助詞「～から」の方に非規範的な使用が多くみられ, 接続助詞「～ので」にはそれほど多く出現していないことが分かる。これについても, 理由が2点考えられる。

1点目は、上記でも見てきたように、接続助詞「～から」は接続助詞「～ので」より先に習得が進むことから、学習者は先に接続助詞「～から」において、助動詞「だ」を挿入した「～だから」という形式を使用しなければならない場合があることを学ぶ。その後、接続助詞「～ので」の習得が進む過程において、同様に「～ので」にも「助動詞を挿入しなければならない場合がある」ということに早く気が付くことができたのではないかと考えられる。

また、もう1点は、教科書および指導の影響である。上記の日本語の教科書『Situational Functional Japanese Vol.1・Vol.2』『みんなの日本語初級I・II』『初級教科書 げんきI・II』の3種を確認したところ、接続助詞「～から」と「～ので」において、「～だから」、「～なので」形式の提示の有無に違いがあることが分かった。以下、表7の通りである。

表7 接続助詞「～から」「～ので」における「～だから」「～なので」形式の提示

教科書名	「～だから」の提示	「～なので」の提示
Situational Functional Japanese Vol.1・Vol.2	なし（「丁寧形+から」のみ）	あり（「普通形+ので」のみ）
みんなの日本語初級I・II	なし（「丁寧形+から」のみ）	あり（「普通形+ので」のみ）
初級教科書 げんきI・II	なし（「丁寧形+から」のみ）	あり（「普通形+ので」のみ）

表7からも分かるように、接続助詞「～から」においては、「丁寧形+から」の提示のみであるのに対し、「～ので」においては「～なので」形式が提示されていることが分かる。これは、「～から」が初級の初期に導入される文法項目であり、この時点では普通体を学習していないこと、「～ので」は普通体を導入した後に導入されることから、このような提示の仕方の違いが出ていると考える。そのため、接続助詞「～から」と「～ので」の非規範的な使用に差が出ているのではないかと考えられる。

「～だから」形式を先に学習すること、教科書で「～なので」の提示があることから、接続助詞「～ので」については、助動詞「な」の挿入・非挿入のルールが接続助詞「～から」よりスムーズに習得されたため、接続助詞「～ので」では非規範の出現が少なかったのではないかと考える。

6. まとめと今後の課題

本研究では、日本語学習者がどのように接続助詞「～から」「～ので」を習得していくのか、学習環境の違い、同様の接続形式を持つ異なる文法項目間の発達過程の比較という複数の観点から、そのプロセスを探ることを目的として、分析を行った。その結果、以下の3点が明らかとなった。

- 1) 日本語学習者における接続助詞「～から」の発達過程は、国内の教室環境、海外の教室環境という異なる環境で学習した場合でも、木下（2007）の結果と同様の発達過程をたどる。
- 2) 接続助詞「～から」「～ので」という異なる文法項目であっても、同様の接続形式を持つ文法項目の場合、両者は同様の発達過程をたどる。

- 3) 接続助詞「～から」と「～ので」の発達過程における相違点として、発達し始める時期と発達のスピードが異なること、非規範的な使用は接続助詞「～から」に比べて、接続助詞「～ので」では出現が少ないことが明らかとなった。その要因には、文法項目の学習順序と機能、文法の難易度などが影響していると考えられる。

まず、1) についてであるが、本研究で分析した海外の教室環境学習者のデータにおいても、木下 (2007) の国内の教室環境学習者を対象とした接続助詞「～から」の発達過程と同様の傾向が見られた。そのため、接続助詞「～から」の発達過程は、学習環境が異なっても、同様の発達過程をたどることが明らかとなった。それに加えて、木下 (2007) では明らかにならなかった発達過程後半に見られた非規範的な使用の「だ」付加については、上級になると見られなくなることが明らかとなった。この傾向は、接続助詞「～から」の発達が、まさに、Kellerman (1985) の提示する U 字型の曲線を描くように進んでいくことを示唆している。橋本 (2015) でも L2 の子どもにおいて U 字型曲線のように発達することが報告されており、これを支持する結果となっている。

そして、2) の接続助詞「～から」と同様の接続形式を持つ接続助詞「～ので」においては、中級で「～ので」、「な」脱落、「～なので」、「な」付加の 4 つすべての分類が見られるようになり、若干ではあるが、中級で「な」付加より「な」脱落が多く、上級ではそれが逆転し、「な」付加の方が多く見られた。そのため、非規範的な使用は「な」の脱落から付加へと移行することが分かり、接続助詞「～から」と同様の発達過程をたどることが明らかとなった。

以上の点を踏まえると、日本語学習者はある文法項目において、複数の形式を使い分ける必要がある場合、まず形式的により単純な形式を先に使用し始める。これは、単純な形式の方が認知的な負荷が少ないからだと考えられる。その後、非規範的な例も産出しながら、他の形式も習得していく。そして、さらに別の非規範的な例も産出し、最終的には規範的な使用へと進むようである。しかし、接続助詞「～から」においては、初級や中級で、非規範的な使用が多く見られ、本研究では、上級での非規範的な使用は出現しなかったものの、学習者によっては定着化する可能性も否めない。また、接続助詞「～ので」においては、上級になっても「な」脱落および「な」付加が見られたことから、これらの使用がいつまで続くかは不明である。これについては、この非規範的な使用を定着させないためにも、適切な時期に教師の介入・指導が必要であると考えられる。特に接続助詞「～から」においては、日本語学習の早い時期に導入するため、「丁寧形+から」の形で提示するケースが多い。日本語の習得が進むと様々な語や品詞に接続助詞「～から」を接続させて使用するようになるが、普通体の名詞やナ形容詞に接続する場合「～だから」形式を使用するというルールを知らないと、非規範的な産出をしてしまう。日本語教育の現場の多くは学習時間に制約があるため、一度学習した初級の文法項目を中級で復習することはあまりないと思われる。また、学習者の大学進学や留学の終了といった環境の変化に伴い、日本語の指導が継続して行えない場合もある。しかし、初級で扱った文法項目であっても、他の文法項目に接続させて使用するものについては、適宜、文法のルールを整理する復習の時間を取るべきではないかと考える。

最後の、接続助詞「～から」と「～ので」の発達過程における相違点は、発達し始める時期や発達のスピードが異なること、非規範的な使用は接続助詞「～から」に比べて、接続助詞「～ので」では出現が少ないことである。その要因としては、文法項目の学習順序と機能、文法の難易度が影響していると考えられる。接続助詞「～から」と「～ので」は、日本語教育の現場において、「～ので」より「～から」を先に導入するケースが多い。さらに「～から」と「～ので」は機能も非常に似通っている。学習者は同じ機能を持つ文法項目を後から学習しても、その必要性を感じない限り、新たな形式を使用しない。そのため、「～ので」の使用が「～から」に比べて遅れたと考えられる。また、南（1964）の分類では、接続助詞「～から」はC類、「～ので」はB類となっている。B類はC類よりも前接する構成要素の種類が限られている。そのため、文法項目の難易度としては、B類の接続助詞「～ので」の方が難易度は高いと考えられる。これらのことから、学習者は初級の段階で「～ので」があまり使用できないのではないかと考える。しかし、接続助詞「～ので」は「～から」と同様の接続形式をもっており、先に「～から」の発達が進むことから、「～ので」の発達は中級から上級にかけて急速に、かつスムーズに進み、非規範的な使用も「～から」に比べてあまり産出されなかったのではないかと考えられる。

本研究では日本語学習者がどのように日本語の文法項目を習得していくのかを明らかにするための一助となるよう、分析を行った。しかし、まだ十分検討しきれていない点もある。学習者の母語による影響や、助動詞「だ」や「な」の付加がなぜ出現するのか、「だ」や「な」と結びつきやすい形態素があるのではないかとといった点である。また、学習者の個人的な要因という観点で考えると、脱落や付加の非規範的な使用を偏って起こしやすい学習者が存在する可能性もある。そのため、日本語学習者の文法習得についてはまだ検討の余地があると考えられる。今後もさまざまな角度から検討していきたい。

参考文献

- 岩崎卓（1995）「ノデとカラー原因・理由を表す接続助詞—」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）』506-513. 東京：くろしお出版。
- 奥野由紀子（2001）「日本語学習者の『の』の過剰使用の要因に関する一考察—縦断的な発話調査に基づいて—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』（第二部）50: 187-195.
- 木下（佐々木）藍子（2007）「日本語学習者における接続助詞『から』の習得に関する研究—接続形式の発達過程に着目して—」修士論文，広島大学。
- 木山三佳（2002）「フィリピン人学習者の『から』と『だから』の自然習得過程—文法化に注目して—」『第二言語としての日本語習得の可能性と限界』19-28. 平成12～13年度科学研究費補助金研究萌芽的研究研究成果報告書，課題番号12878043 お茶の水女子大学大学院日本語教育コース。
- 木山三佳（2003）「連用修飾節を構成する接続助詞類の使用実態—作文データベースを用いて—」『言語文化と日本語教育』25: 13-25.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子（2016）「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』6(3): 93-110.
- スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語初級Ⅰ初版本冊』東京：スリーエーネットワーク。
- スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語初級Ⅱ初版本冊』東京：スリーエーネットワーク。
- 田代ひとみ（1995）「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85: 25-37.
- 趙順文（1988）「『から』と『ので』—永野説を解釈する—」『日本語学』7: 63-77.

- 筑波ランゲージグループ (1991) 『Situational Functional Japanese Vol.1』 東京：凡人社。
筑波ランゲージグループ (1992) 『Situational Functional Japanese Vol.2』 東京：凡人社。
橋本由香 (1989) 「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析—話の展開と接続形式を中心に—」『日本語教育論集』 5: 159-174. 筑波大学留学生センター。
長友和彦 (1993) 「日本語の中間言語研究—概観—」『日本語教育』 81: 1-18.
永野賢 (1952) 「『から』と『ので』はどう違うか」『国語と国文学』 29(2): 30-41.
橋本ゆかり (2006) 「幼児の第二言語としての動詞形の習得プロセス—スキーマ生成に基づく言語構造の発達—」『第二言語としての日本語の習得研究』 9: 23-41. 東京：凡人社。
橋本ゆかり (2015) 「用法基盤モデルから見た幼児の第二言語としての理由表現の習得プロセス—インプットと母語に基づくスキーマの生成と相互作用—」『認知言語学研究 (Journal of Cognitive Linguistics)』 1: 113-137.
坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011) 『初級教科書 げんき I・II』 東京：ジャパントイムズ。
南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 東京：大修館書店。
峯布由紀 (2007) 「認知的な側面からみた第二言語の発達過程について—学習者の使用する接続辞表現の分析結果をもとに—」『日本語教育』 134: 90-99.
Kellerman, Eric. (1985) If at first you do succeed. In: Susan M. Gass & Carolyn G. Madden (eds.), *Input in second language acquisition*, 345-353. Rowley, MA: Newbury House Publishers.

関連 Web サイト

- 国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search> (2018年10月15日確認)
筑波大学「筑波日本語テスト集 TTBJ」 <http://ttbj-tsukuba.org/p1.html> (2018年11月5日確認)

Developmental Process of Conjunctive Particle “kara” in Japanese Language Learners: A Comparison of the Learning Environment and Conjunctive Particle “node”

SASAKI Aiko

Doctoral Course The United Graduate School of Education
Tokyo Gakugei University (Yokohama National University)/
Adjunct Researcher, JSL Research Division, Research Department, NINJAL

Abstract

This research aims to examine the developmental process of the conjunctive particle “から (kara)” by learners of different educational environments (i.e. second vs foreign language classrooms), and contrast it with “ので (node)”, another conjunctive particle, using the International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS) of the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL). The learners are Korean, Chinese, and English L1 speakers who have studied Japanese in their own countries.

There are three main results found: 1) the development of “kara” is the same for foreign and second language learners; 2) even though “kara” and “node” are grammatically different, however they follow the same developmental process; and 3) although “kara” and “node” follow the same developmental process, the stage of development and the speed of development are different, and misuse is less likely to occur in the use of “node” than “kara”. The reason for point 3) may potentially be due to the earlier introduction of the grammar “kara” than “node” in Japanese language classes, the function is redundant hence using “kara” may have been sufficient, and “node” has more restrictions in its use.

Key words: Japanese language learners, developmental process, conjunctive particles “kara” and “node”, Learner corpus “I-JAS”